

第4回

人と社会の病理

—近代ヨーロッパの思想と文学の知見から—

2017.11.22 (水) 13:30-15:30

富山大学人文学部1階大会議室

一般の方の聴講可・事前申込不要・無料

「人文知」

コレギウム



「西欧近代思想のなかの精神病理 —カントの理性批判をめぐって—」

人間科学講座（哲学・人間学）

准教授 澤田 哲生

【要旨】20世紀から今日までの哲学研究を俯瞰すると、臨床、ケア、看護など、人間の病理をめぐる思索が一つの大きな潮流を形成している。この潮流は、理性の外側の現象（病理、狂気、倒錯、脱法行為、等々）を軽視してきた西欧近代哲学への反省を踏まえている。しかし、西欧近代の思想をおしなべて理性と狂気の区別、あるいは後者の前者からの閉め出しと考えることは適切なのだろうか。この問題をイマヌエル・カントの理性批判を糸口にして検討することで、病理的な現象に対する哲学的なアプローチ、そしてその意義を概説する。

「犯罪を人文学する— フランス言語文化からのアプローチ」

ヨーロッパ言語文化講座（フランス言語文化）

准教授 梅澤 礼

【要旨】私たちがよく耳にする犯罪学という学問が生まれたのは、19世紀末のヨーロッパにおいてである。これ以降犯罪は、おもに生物学的、社会学的、心理学的観点から研究されてきた。20世紀中頃になると、フランスを中心に、犯罪は歴史学の対象にもなる。こうして犯罪に関する学問の歴史や報道の歴史が明らかにされ、歴史上の犯罪者たちの姿も明らかにになった。しかし、犯罪がどのような言葉で語られてきたのかというレトリック研究、作家たちは犯罪をどう描いたのかという作品研究、そして犯罪者は何を語っていたのかという作家（としての犯罪者）研究はまだ行われていない。本発表は、犯罪の人文学研究における、こうした文学的アプローチのこころみである。